會　　務

土木學會誌　第十五卷號六號　昭和四年六月

○昭和四年四月十八日役員會を開く田邊會長，中川，八田の兩副會長，古市前會長，黑河內，久保田，眞田，福田，前川，近，牧野の各常議員丹治，村の兩主事出席田邊會長議長席に着き丹治，村の兩主事より一般會務の報告あり終つて左記事項を決議せり。

△工學會定款變更に關する協議は追て同會よる定款變更案の提示あるまで保留すること。

△ウヰリアム・ハバート・バー氏來朝につき歡迎實行委員と打合せの上本會に於て同氏に講演を依頼し終つて歡迎晩餐會を開催すること。

△主事村幸長君地方へ轉任のため辭任につき其後任として會員牧野雅樂之丞君を推薦すること。

△雨森民雄君他四名を會員に青木利一君他十七名を准員として各入會方を承認すること。

△准員小栗盛三郎君他二名の退會を許可すること。

○昭和四年五月十四日午後五時より日本工業倶樂部に於て講演會を開催し米國コロンビヤ大學名譽教授ウヰリアム・ハバート・バー氏の講演あり參會者三百名ありたり，終つて同所に於て全氏歡迎晩餐會を開き列席者六十名ありたり。

○昭和四年四月十六日以降五月十五日迄に入會を承認し各名簿に登錄したる者下の如し。
（○印は轉格を示す）

學　生　員

山口菊次郎君　　角　卯太郎君

○昭和四年四月十六日以降五月十五日迄に寄贈又は交換を受けたる雜誌其他次の如し。

名古屋工業會々報第 73 號	1 冊	名古屋工業會
明電舍ジヤーナル第 5 卷第 2 號	1 冊	守谷商會
工業と社會第 4 號	1 冊	東京工業會
第七回保線講話會記錄	1 冊	鐵道省工務局
愛知縣土木材料試驗報告	1 冊	愛知縣土木部
土木と建築第 4 號	1 冊	土木建築業組合
會報第 4 號	1 冊	日本動力協會
セメント界彙報第 209 號第 210 號	2 冊	セメント界彙報發行所
電氣製鋼第 4 號	1 冊	電氣製鋼研究會

鐵道技術第 4 號	1 冊	鐵道技術社
三菱電機第 4 號	1 冊	三菱電機會社神戸製作所
內外工業時報 5 月號	1 冊	最新工學普及會
工業 5 月號	1 冊	大阪工業會
工學第 5 號	1 冊	東京工學社
工業之大日本第 4 號	1 冊	工業之日本社
工事畫報第 5 號	1 冊	工事畫報社
土木建築材料商報第 319 號	1 冊	東洋建材商報社
土木建築資料通信第 174 號 175	2 冊	土木建築資料通信社
日立評論第 4 號	1 冊	日立評論社
帝國學士院記事第 3 號	1 冊	帝國學士院
シビル第 8 卷第 5 號	1 冊	シビル社
國立公園第 2 號	1 冊	國立公園協會
研究報告第 9 號	1 冊	製鐵所研究所
地震研究所彙報第 6 號	1 冊	東京帝大地震研究所

交換の分

衞生工業協會誌第 3 卷第 4 號	1 冊	衞生工業協會
帝國鐵道協會々報第 30 卷 4 號	1 冊	帝國鐵道協會
建築雜誌第 520 號	1 冊	建築學會
工業要錄第 5 卷第 4 號	1 冊	工業資料調査會
日本建築士第 4 卷第 4 號	1 冊	日本建築士會
日本鑛業會誌第 528 號	1 冊	日本鑛業會
工政第 114 號	1 冊	工政會
工業化學雜誌第 32 編第 5 冊	1 冊	工業化學會
同上歐文綴	1 冊	同上
造船協會雜纂第 85 號	1 冊	造船協會
港灣第 5 號	1 冊	港灣協會
電氣學會雜誌第 489 號	1 冊	電氣學會
機械學會誌第 143 號第 144 號	2 冊	機械學會

第十四回土木學會視察旅行記事

年一年に本學會の視察旅行は盛大になつて行く。今回は日時といひ，場所といひ，天氣といひ，殊に關西支部の方々が大變に努力して下さつたので其の盛んだつた事は豫想外である。行程丈を書き拔くと次の樣である。

第一日 4月28日(日)

午前 9時 30分 大阪鐵道局に集合

〃 10時同廳舍會議所に於て講演「大阪を中心とせる鐵道に就て」
鐵道省大阪改良事務所長 會員 木村芳人君

〃 10時 30分講演終了

〃 11時 20分 大阪驛發臨時列車にて大阪臨港鐵道視察

午後 0時 10分 大阪築港着，同所に於て可動橋（リフトブリッヂ）見學，見學終了後築港上家に至る同所に於て記念撮影

〃 1時 築港上家に於て晝食(大阪市寄贈)

〃 1時 30分 同所に於て講演

「大阪港の施設に就て」 大阪市港灣部技術課長 會員 松田健作君

「堂島川可動堰堤に就て」 大阪市土木部河川係長 會員 荻野竹四郎君

「島屋運河可動橋（バスキユールブリッヂ）」に就て 會員 山本卯太郎君

〃 2時 30分 講演終了同所より特別仕立の汽船にて大阪港內視察

〃 3時 大阪北港運河口特設棧橋着，島屋運河可動橋見學

〃 4時 17分 安治川口驛發（西成線）列車にて大阪驛に至る

〃 4時 32分 大阪驛着，徒步にて堂島川可動堰（テンダーゲート）見學後懇親會場(中央公會堂)へ

〃 5時 30分 大阪市北區中ノ島公園中央公會堂に集會

〃 6時 同所に於て懇親會開宴（開宴中の餘興其の他は大阪市附近各電鐵會社其の他有志よりの寄贈）

〃 8時閉會

大阪市に一泊

第二日 4月29日(月，天長節)

午前 9時 30分 大阪驛發

〃 10時 7分 京都驛着市營電氣局乘合自動車にて堺町御門に向ふ(約 25分)

〃 10時 25分 堺町御門內に集合し御大禮式場諸設備拜觀（約 2時間）

午後 0時 30分 富小路御門(出口)より徒步にて(約 6町)京都市役所へ

〃 1時 同所に於て晝食（京都市寄贈）晝食後電氣局乘合自動車にて叡山電鐵出町柳驛に向ふ

〃 2時 叡山電鐵出町柳驛發車

〃 2時 30分 八瀨驛着，直ちにケーブルカーに乘換て山頂に至る，ケーブルカー終點より徒步約 4町，空中索道電車を見學し再び八瀨驛に降る

〃 4 時 八瀬驛より叡山電鐵にて出町柳驛に向ふ
〃 4 時 30 分 出町柳驛着
〃 5 時 都ホテルに於て有志會食
〃 6 時 30 分 會食終了後同所に於て解散

先づ順序として東京出發からたどつて行かう。

27 日 の午後 9 時 10 分東京發大阪行第 19 列車に東京よりの參加者井上副會長，丹治主事を初め 25,6 名增結寢臺車の中に納る。 旅客が溢れる程で通路も立ち塞れて食堂車へ行く事も出來ない。仕方がなく寢臺車の中で麥酒を痛飲してゐる元氣な會員も見受けられた。

薄曇りの夜蔭を衝いて列車は驀進する，明日の天氣は先づ大丈夫らしい。翌曉未だ 6 時と云ふに米原驛で關西支部の木村芳人君，川口愛太郎君及御手傳ひとして大鐵，大改の諸君の御出迎を受けた。

本旅行の第一歩として此の驛で辨當と茶を買込んだ。9 時 30 分大阪驛着一行御出迎ひの關西支部役員の方々と共に大鐵局の廳舍に向ふ。玄關では折角の日曜に態々御手傳ひして下さる大勢の諸君の御接待の下に大阪市交通網の地圖其の他參考圖を頂いて三階の會議室に入る。會場は早や殆んど滿員の盛況である，300 人と註された。正 10 時關西支部幹事長後藤佐彦君先づ一場の挨拶がある。續いて鐵道省大阪改良事務所長木村芳人君の「大阪を中心とせる鐵道に就て」の演題で

京阪神地方の鐵道旅客貨物の集散狀態から，是に對する鐵道施設として吹田操車場，阪神間複々線，大阪旅客驛，梅田貨物驛の設備計畫の概要及臨港線と西成線，城東線の連絡，私設電鐵との關係及歌島客車操車場に於ける計畫等地方發展開發の中樞機關たる鐵道が大大阪を中心として如何に萬全の策を採りつゝあるかを約 30 分に亘つて熱心な講演があつた。講演の終了後臨港線視察の臨時列車の發車迄の餘裕時間中各會員は隨意新廳舍の參觀や屋上バルコニーから大阪表玄關口附近を眼下に眺望し旅行氣分に陶醉する。やがて 11 時 20 分臨港線視察の臨時列車は大阪驛を發車した。抑當臨港鐵道の布設は大阪築港の起工せられて 4 年後即ち明治 34 年 9 月大阪市から建議せられたのに端を發したものだと云ふから約 30 年前からの事である。其の間線路撰定に當つても幾多の討議が行はれて結局現在線即ち關西本線今宮驛から分岐して津守町を經て木津川，尻無川を横斷しそれから西南に走つて大阪港に到るものとなつたのである。本鐵道の建設哩程は今宮驛から本線延長 5.2 哩，側線延長 9.2 哩である。今宮驛から浪速驛（臨港操車場）迄は鐵道省負擔で，それから先築港の倉庫地帶内は大阪市負擔で施工されたが營業は全部鐵道省で取扱ふものである。線路は今宮驛から尻無川迄は人家稠密であるから高架橋の構造としそれから先埠頭地に到る間は新開の地で人家も少いし且附近は倉庫や工場に對して最も適當な地帶であるからそれ等に專用線の引込みを便にして貨物線としての使命を完からしむる爲地平線である。

前記木津川及尻無川の横斷は徑間300呎の複線式下路ダブルワーレンの構桁を架設してゐるが此の一徑間鐵桁の重量は 830 噸で我國有鐵道に於ける最重のものである。尙天保山運河,三樋入堀及天保山支線運河の 3 箇所の運河横斷には可動橋(リフトブリツヂ)を設備して何れも 78 呎の中央徑間は垂直高 9′-3″ を昇降する事が出來て船運の阻害さるゝ事を無くしてゐる。然して船の往來が相當頻繁なるに反し列車回數は現在 1 日 5 往復位であるから可動橋は上昇位置を以て定位としてゐるから運河としての役目は殆んど從前通りに果されてゐるわけである。當臨港鐵道の總建設費は約 6 568 000 圓であつて內鐵道省負擔が 5 956 000 圓大阪市負擔が 612 000 圓である。

從來大阪港に於て呑吐せらるゝ貨物は年間 1 200 萬噸であるが臨港連絡設備としては唯西成線櫻島,安治川口兩驛があるのみであつたから鐵道で輸送せらるゝは僅に其の 14% 170 萬噸に止り他は不便を忍び河川,運河を利用し艀舟により連絡せられたものであつた。此如海陸連絡設備不充分の爲本港の發展は少からず阻害せられたが本鐵道の開通により是等の障壁は除却せらるゝことゝなり玆に始めて築港本來の使命たる海陸連絡の機能を充分に發揮し得るに到つたのである。

一行を搭乘した臨時列車は午後 0 時 10 分築港埠頭近くに到着した。そして前記三樋入堀のリフトブリツヂの運轉狀態を親しく視察した。此の可動橋の大體を摘錄すると

全徑間 30′, 78′, 30。可動桁中央徑間 78′ 此の桁重 96.3 噸 昇降高 9.′25。上昇位置高水位上 10.′20 低水位上 16.′50。下降位置 低水位上 7.′00 下部構造費 63 372 圓鐵桁(架設共) 42 433 圓桁可動設備費(レールロツキング共) 15 895 圓 計 121 700 圓

天保山運河及天保山支線運河上のリフトブリツヂも全く上記と同樣である。

斯くて一行は築港の第一突堤の上家に行く。此の上家は一週間程前に本港竣功祝賀會の會場であつたので築港工事の說明圖表等が色々に陳列されてあつて非常に好都合であつた。一同は記念撮影をする,晴れ渡つた大空と青海原が背景である。汗ばんだ膚に凉しい潮風がそよぐ心地は又一入である。

それから隣りの上家で晝食の御馳走になる,大阪市の寄贈で總勢 150 を算する,感謝に堪えない。硝子張りの天井だから眩しい位である,萬國旗と幔幕が輝しい。食事後港灣部技術課長松田健作君から「大阪港の施設に就て」の演題で明治の初年から幾多の困難を經て漸く完成した現在の築港迄の辛酸の蹟を顧み,現在及將來の本港の貿易狀態,築港工事施設の概要殊に基礎杭の試驗等有益なる講演を拜聽することを得た。

本港昨年度に於ける記錄によれば 1 980 000 坪の港內に同時刻 20 萬噸の船を收容し得たといふから即港面積 10 坪に對して 1 噸の割合であつて恐らく港としての最大收容力であると云ふ。現在に於て既に斯くの如くである。將來の發展や實に期して待つべきものであらう。

次に市土木部河川係長荻野竹四郎君から此の日の最後に視察すべき堂島川可動堰に付て大略の説明があつた。

近年市内を縱横に貫通する小河川の水深漸次減少し且つ水質の汚染甚しく舟筏の便を缺くのみならず市民衛生上亦看過し能はざるの狀態に瀕した。依つて市は十數年前から浚渫工事を施行しつゝあるも水流の汚濁に到つては獨り舊態依然として之を淨化するの方法は唯大川筋に適當なる施設を加へ其の流れを制して之を枝川に導くに非る限り到底效果を擧げ得べからずとして即本テンダーゲートの設置を見るに及んだものである。可動堰の機構其の他に就ては實地見學に讓ることゝして次で可動橋設計製作の專門家たる會員山本卯太郎君から「島屋運河人道跳上橋に就て」大體の説明があつた。

以上の講演が濟んで午後2時30分此の屋舍を辭して特に一行の爲準備された大和，神崎丸の二汽艇に一同分乘した。港内は長閑な春日の下に大小樣々の船がのびやかに浮んでゐる。芭蕉翁ならずとも一句湧き出そうな狀景である。一行の船は突堤を巡り港の眞中を抜けて港外に出た。それから北防波堤の外側に沿ふて戻り櫻島の埋立地口から安治川に遡つた。そして島屋運河口近くの特設棧橋から上陸した。風もなくぽかぽかと暖い。長い列をなして一行は運河沿ひの草原を進んで行く。附近の住民等が物珍しげに見送つてゐる，平和な一幅である。行くこと 4,5 町で此の運河に人道跳上橋が架設してある。此の橋梁は全徑間 50 呎幅員 29 呎のバスキユールブリツヂで此の上昇角度は約 80° である。開閉に要する時間は電氣動力で約各 1 分 30 秒，非常時のガソリンで 6 分である。尙此の橋梁と並行して直ぐ近くに同型の省線西成線の鐵道橋がある。近來著しく斯の種の可動橋の利用が盛んになつた事は取りも直さず陸上交通の延長を自由ならしめ水陸兩部の客貨の集散に便し交通上，將又產業上革命的發達を期し得るものである。

一行は山本卯太郎君から本橋の説明を聽取し乍ら運轉作業狀態を親しく視察して此處を辭し打揃ふて西成線の安治川口驛に向つた。そして 4 時 17 分增結車に納つて 14,5 分にして大阪驛に到着する。絶好の日曜日和に大阪驛の雜踏は甚しい。市民は勿論一般旅行者の永年渴望してゐた當驛の改築も漸く具體的の設計なり目覺むる許りの堂々たる更生の雄姿を見るの日も後 2,3 年であらう。一行は新裝の御堂筋即改稱第一號路線の心地よいペーヴメントを踏んで中ノ島へ向ふ。

堂島川可動堰は堂島川を跨いで中ノ島へ到るもので幅員 31 呎の人道橋を形作つてゐる。全長 228 呎で鐵筋混凝土 4 連のスパンドレル・アーチである，此の拱の各スパンに幅員 50 呎，高 14 呎のテンダーゲートを備へてゐる。但最左岸の一徑間は扉の幅 40 呎で此の徑間全幅で上流へ延長約 40 間を本川から締切つて閘門の設備としてゐる。テンダーゲートの開閉に要する時間は各 2 分位である。此の可動堰の使用は朔望の前後各 3 日間即 1 箇月 2 週間に

亘り舟行稀な夜間に於てのみ閉鎖するものである。

本堰堤は昭和元年 6 月着手本年 3 月竣功したもので工費約 77 萬圓である。當可動堰の效果は自餘の 4 箇所に於ける可動堰の竣功を俟つて始めて其の本能を發揮すべきもので豫想によれば 5 箇所の可動堰が全部竣功の曉には從來殆んど流速の認むべきものなかつた高津入堀，難波新川及鶴川の三川の如きも 5 寸～2 尺の流速を見るに到るべく從つて積年の汚水を掃滌し保健衛生上に貢獻する所甚大であらう。一行の爲特に此のゲートの運轉操作を取扱つて下さつた係りの方々に深く感謝する次第である。

暮れるに遲いなごやかな夕 6 時から中ノ島公園內中央公會堂で 140 名からなる懇親會が催された。輝しいシヤンデリヤの下，色とりどりの草花が馥郁たる芳香を漂してゐる。田邊會長一場の挨拶があつて次に後藤幹事長の答辭があつた。此れを期して賑かな宴は開かれた。水の都をえりすぐつた纖手の斡旋で宴は忽ち加速度的に可興に入る。光の亂舞，芳香の漂ひ，底唱即吟も洩れ出るかと思はれる頃急霰の如き拍手が起つた。丹治主事の發議指名に依つてテーブルスピーチが開始された。先づ那須章彌君得意の齒切れのいゝ辯舌を振つて大大阪禮讃を提唱する次で瀧山與君シビルインヂニヤとナポレオンとの比較研究を試みて滿場の喝采を受ける。宮長平作君頤髯を撫しつゝ大聲叱呼東京附近在住會員諸君の懇親會等に不熱心な事の棚下しを始める。井上秀二君は今夜の懇親會が如何に樂しく愉快なものであるか!! 本視察旅行も少くとも 1 年おき位には當地で催したい等と提議して會場も割れる許りの哄笑を博する。最後に丹羽鋤彥君萬歲三唱一同乾盃によつて一先づ演說も終りを告げた。折柄突如として起るジヤズバンドにつれて餘興河合ダンスが開始された，花羞ぢらう乙女達の輕快な舞踊は次から次へ展開されて行く。滿場の諸君暫し恍惚として無我の境にひたる。が春宵一刻價千金とかや，定刻 8 時名殘を惜しみつゝも一同散會した。

翌 29 日は昨日にも增して天氣晴朗早や初夏らしい陽氣である。初めの豫定では午前 8 時 30 分より 9 時迄の間に新京阪電車で京都に向ふ豫定であつたが參加者が意外に多數に上つた事と本日の祭日に一般旅客の大混雜とを慮つて省線列車を利用する事とした。一行約 100 名は特に增結車 2 輛に納つて 9 時 3 分大阪驛發，10 時 7 分京都驛着，直ちに京都市電氣局の御好意によつて特に準備された乘合自動車 7 臺に分乘して御所拜觀の入口堺町御門に到る。諸車蹕々として行人なだれの如き大路小路も維新前迄は大宮人が櫻かざしてのびやかに往來した事かと思へば轉た嗟嘆これ久しうせざるを得ない。

當地での參加者約 20 名を加へて一行は紫地に白く土木學會關西支部と染め拔いた小旗を先頭として團體拜觀者組となる。御所內の通路が一般拜觀者と異つてゐる。松籟颯々として今更の如くそゞろ往古を偲びつゝ白砂を踏んで進む事約 15 分位で漸く內裏の御門をくゞる。四列となつて愈々御式場を拜する。

典儀取り行はせられてから早や半歳幾分色褪せたれども數流の錦旗，數鼓の鉦鼓，肅然として思はず襟を正す。大嘗場，饗宴場の御有様茲に徒らに禿筆を汗ばましむるに及ばないであらう。謹んで皇統連綿無窮の御榮をことほぎ奉る。此の日の拜觀者實に 30 萬と目されたが其の人の流れは澱んでは流れ，流れては澱み遲々として蝸牛の歩である。漸く富小路御門に出た時は早や 12 時を過ぎてゐた。一同は徒歩で約 6 町京都市役所へ到る廳舍の屋上バルコニーの天幕帳りの席には早や當市寄贈の晝餐の準備が整へられてゐる。深謝して御馳走になる。尚此處で市役所の方々が唯今開催中の都踊の入場券を料金割引して賣捌いて下さつた。斯くて 1 時 30 分一行は再び市のバスに分乘して叡山電鐵の出町柳驛に向ふ。此處も又遊覽客で大した混雜である。約 30 分で八瀬驛着，遊園地を拔けて登山ケーブルの始驛西塔橋驛に到る。猫の額程の驛前廣場には登山客が二列縱隊に曲りくねつて並んでゐる。容赦なく日はじりじりと照りつける，人いきれ丈でも蒸し蒸ししして汗がしみ出す。案外早く 14,5 分も待つと大概ケーブルカーに乘る事が出來た。

定員 80 名の車に身動きも出來ない程に押しつめられて物凄い程の勾配をゆるゆると登つて行く。序に我國に於ける此の種鋼索線の營業成績を御紹介する。

鋼索線營業成績調 （昭和二年度）

會社別 / 種別	大軌生駒線	箱根登山	摩耶	信貴生駒	妙見	朝熊登山	筑波山	叡山線	男山	高尾山	比叡山	天橋立
開業年月日	大正 7.8.29	10.12.1	14.1.6	11.5.16	14.8.1	14.8.26	14.10.12	14.12.20	15.6.22	昭和 2.1.12	2.3.15	2.8.13
軌間	3′-6″	3′-0″	4′-8½″	3′-6″	4′-8½″	3′-6″	3′-6″	3′-6″	3′-6″	3′-6″	3′-6″	3′-6″
營業哩	0.7	0.8	0.6	1.1	0.9	平坦線を含む 3.3	1.0	0.8	0.3	0.6	1.2	0.2
等級	單	2	單	單	單	單	單	單	單	單	單	單
旅客運賃 片道	12	上り 25 下り 15	21	30	30	34	45	35	15	125	上り 45 下り 40	20
旅客運賃 往復	19	40	39	50	55	64	75	55	25	45	70	30
同一哩上當 片道	17.1	31.3	35	27.3	33.3	10.3	45	44	50	41.7	37.5	100
同一哩上當 往復	13.6	25.0	32.5	22.7	28.0	9.7	37.5	69	41.7	37.5	29.2	75
線勾路配 最急	1/3.0	1/5.0	1/2.9	1/4.4	1/2.4	1/2.0	1/3.0	1/5.3	1/4.4	1/2.3	1/2.0	1/2.1
線勾路配 平均	——	1/5.0	1/2	1/7.3	1/4.1	1/8.0	1/4.0	1/4.2	1/4.8	1/4.2	1/3.0	1/3.0
資本金	40 970 000	6 600 000	2 000 000	300 000	500 000	750 000	350 000	52 000 000	1 500 000	600 000	1 000 000	250 000
建設費 總額	727 072	297 226	636 369	775 521	637 679	1 302 500	575 396	945 930	486 270	768 944	1 080 241	221 352
建設費 1哩當	1038 674	371 533	1 143 948	705 019	708 532	394 700	575 396	1 182 410	1 620 900	1 281 573	858 534	1 106 760
營業收入	151 711	24 482	87 922	115 373	80 776	132 241	71 228	242 669	62 246	79 349	137 126	15 786
營業費	79 347	12 712	45 188	73 965	47 768	98 089	33 587	78 553	27 246	53 208	60 733	13 919
益金	72 364	11 770	42 734	41 409	33 008	34 161	37 641	164 117	35 000	26 141	76 393	1 867
建設費に對する益金歩合	0.100	0.040	0.063	0.053	0.520	0.250	0.050	0.173	0.072	0.044	0.117	0.022
一日平均 收入	415	69	241	316	221	362	195	665	171	279	525	112
一日平均 支出	216	35	124	203	131	268	92	215	75	187	232	99
一日平均 益金	198	32	117	113	90	94	103	450	96	92	293	13
乘車人員一日平均	4 188	396	1277	1 612	973	1 023	577	2470	1297	1 236	1 466	819
車輛數	4	2	2	2	4	7	2	2	2	2	2	2
一車定員	66	30	62	50	61	平坦線 56 40	53	80	25	50	44	25
一日平均定行哩	122	72	59	106	83	291	42	91	75	34	88	18

此のケーブル線の項上の四明ケ岳に到着したのが3時頃だつた。この四明ケ岳から中腹の山道を涼を味ひ乍ら行く事4丁で空中ケーブル線の高祖谷驛に到る。此處でも出札口前に旅客は列を作つてゐる。眼前には深い峽谷が底も霞む程そゝり立つてゐる，山一帶の樅林内ではよく郭公の聲を聞き得るそうである，膚寒い涼風がそよいで行く。二つの峽谷を越して對岸の延曆寺驛迄其の亘長 642 米間に 1 箇所支柱がある許りである。索條を傳つて定員 20 名乘りの吊籠が 1 秒 3 米の速さで動いて行く樣は蓋し偉觀である。日進月歩の文化の魁は眞に土木技術からであるとの念を今更の如く深うした。

斯くて英姿颯爽久遠動るぐまじき比叡の息ぶきに送られ乍ら下山して有志者 100 餘名は都ホテルの懇親會場に向つた。峯上に漂ふ波雲がほのかに彩り初めた頃 5 時新綠濃き東山を目近く眺め乍らホテルの大食堂で懇親會は開かれた。會酣の頃川上浩二郎君先づ一首を捻る

山を切り　川を穿ちて　あめつちの
荒神こらす　土木技術者

那須章彌君は此の時實朝鄕をふつと思ひ浮んだそうである，そしてこれに返して曰く

山は裂け　海はあせなん　世なりとも
土木技術者　務めざらめや

一同勇氣に感じて拍手喝采する。斯くて梵鐘條々として夕空に響く頃和氣靄藹の間に解散した。本旅行に對して多大の御援助を賜つた下記の方々に厚く御禮申上げる。(順不同)

竹中藤右衛門君，田中眞喆君，內山熊八郎君，池野敏雄君，大林義雄君，鐵高久吉君，大阪市電氣局，大阪鐵道株式會社，大阪電鐵軌道株式會社，京阪電鐵株式會社，阪急電鐵株式會社，阪神電氣鐵道株式會社，南海鐵道株式會社，鴻池忠三郎君，大阪市長，京都市長，京都市電氣局，京都電燈株式會社叡山電鐵部。

尙參加者名錄を載する(順不同)

阿部謙夫	井上秀二	稻垣兵太郎	江橋貞二	遠藤藤吉	大河內甲一	川上浩二郎
鬼海治三郎	小室親一	坂本雅雄	鈴木寅吉	丹治經三	堀永德太郎	美藤義利
宮長平作	山本新次郎	黑河內四郎	平井喜久松	山中良樹	堀越一三	丹羽鋤彥
松村務	片野文吉	中島了藤	那須章彌			
釘宮磐	林紀彥	青山咸脩	淺見忠次	荒川惠助	井上伊次	伊藤孝治
伊村高親	和泉三郎	石井武一	岩岡武博	岩切良助	岩淵英之助	上田寧
植原勇	江藤禮	遠藤樺	小川信次	遠智猪之助	緒方長一	大井清一
大串榮太郎	岡崎保吉	岡山親次郎	岡本專太郎	荻野竹四郎	梶浦正武	木下芳平
九鬼秀治	小林彥治	後藤佐彥	駒田晋明	近藤政光	近藤泰夫	齋藤飾
竿田秀靜	境田賢吉	清水潔	重松愿	鈴木重英	田邊朔郎	高石庫治
高橋逸夫	高橋未治郎	高橋俊熙	武居高四郎	武本光太郎	爲田惠四郎	永井專三
中林興一郎	永田庄吉	長島敏	西出辰次郎	西畑常	畑生德郎	花井又太郎
林千秋	平川保一	平瀨三雄	平野重郎	平野正雄	廣石一匡	福留並喜

藤田弘直　細野芳彦　堀　威夫　松島寛三郎　松田健作　松永　博　三浦久藏
溝江五月　溝江　昇　溝口親種　村瀬吉雄　森　友雄　森　義之　森井健介
森下文作　安田靖一　山内新一　山口秀造　山名　晃　山本亥太郎　山本卯太郎
山本康平　吉川國近　吉田岩五郎　吉田　登　吉山　盛　和澤清吉　渡邊義道
奥中喜代一　河村孝一　坂本助太郎　龜田　惠　岡部二郎　鈴木義一　岩田成實
黑須七郎　瀧山　興　吉田耕一　佐藤英夫　高橋三省　梅本岩吉　野々口市太郎
富田直治　島　重治　川口愛太郎　木村芳人　青木精一　山本一之助　佐武正一
山下輝夫　矢野謙二　高橋嘉一郎　近藤博夫　岩木榮二　古川淳三　津田孝彦
五十嵐三郎　武智正次郎　原田民夫　高西敬義　小林　武　中原　武　小野榮作
大岡忠一　沖田兼一　川上暢夫　佐古田淺男　關川　清　吉田　直　吉川義太郎
村山喜一郎　近藤幸夫　關谷新造　高田　景　大木外次郎　木村　喬　田口俊一

本會事務所より

北村嘉太郎　山岸倉藏　小林孝造　海老澤昇次郎　豐田松吉　石井義興

本旅行費內譯は次の通りである

支　出

摘　要	金　額
東京大阪間二等汽車賃 10 人寢臺料 29 人料金	245.820 円
同列車ボーイ及朝食（弊當，茶）	10.950
大阪驛築港間汽車賃 170 人	126.000
安治川口大阪驛間汽車賃 104 人	20.100
大阪京都驛間汽車賃 113 人	136.000
叡山電車賃 83 人	35.690
京都市街自動車賃切料	50.000
懇親會料理及餘興費	2 170.000
公會堂借料及會場諸設備費	215.510
都ホテル晩餐會費	243.000
雜　費（謝禮其の他）	207.800
計	3 461.370

收　入

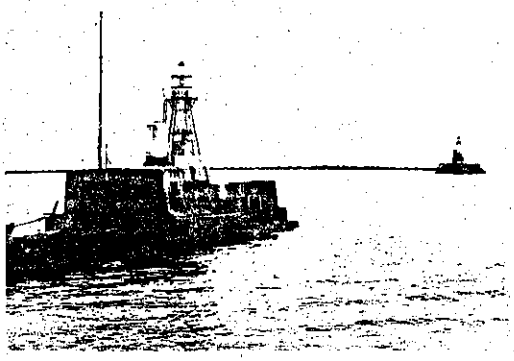
摘　要	金　額
寄　附　金（大阪市に於ける）	1 500.000 円
參加會員より徵收會費	1 456.950
本部補助金	334.420
大阪支部補助金	170.000
計	3 461.370

寫眞第一

土木學會第十四回視察旅行記念撮影（昭和 4 年 4 月 29 日 於大阪築港埠頭）

（土木學會誌第十五卷第六號寫眞）

寫眞第二

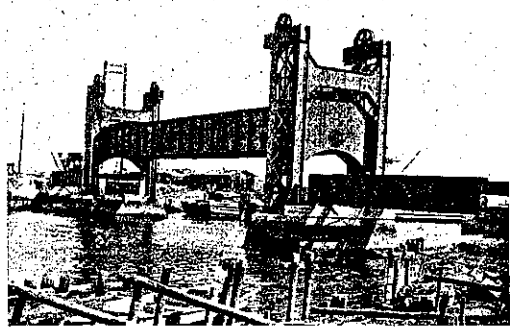


大阪港口

寫眞第三

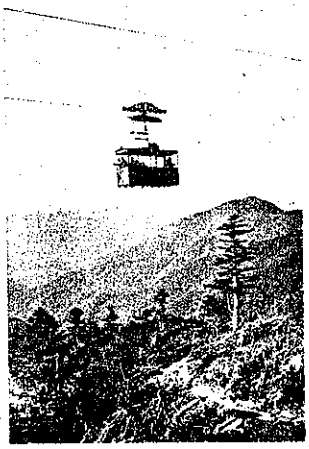
京都御所

寫眞第四



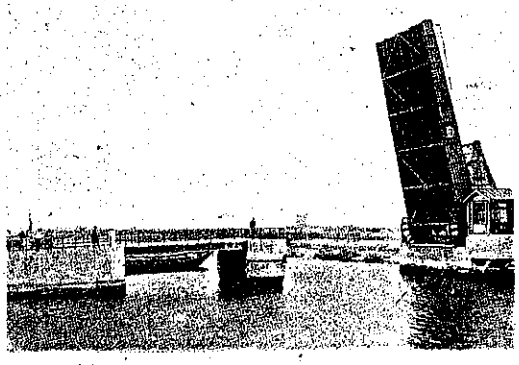
大阪臨港鐵道三樋入堀リフトブリッヂ

寫眞第五



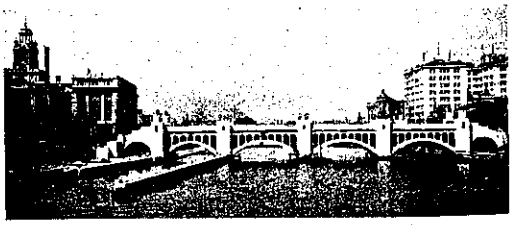
京都叡山空中ケーブル

寫眞第六



大阪島屋運河跳上人道橋

寫眞第七



大阪堂島川可動堰全景

雜誌閲覽に就ての會告

下記の雜誌は本會事務所に備付置候間御希望の向は下記時間內御隨意に御閲覽相成度候。

閲　覽　時　間

日曜日及祭日休，土曜日自午後一時至同四時，其他 自午後四時至同八時。

但し役員會，委員會等開催の日は御斷り致すこと有之故も計られず候間豫め御承知置被下度候。

備　付　雜　誌

Engineering
Engineering News-Record
Le Génie Civil
Railway Gazette
衞生工業協會誌
機械學會誌
業務研究資料（鐵道大臣官房研究所）
建設
建築雜誌
工學部紀要（東大，京大，九大）
工學報告（東北帝大）
工業化學雜誌
工事畫報
工政
港灣
國際建築時論
造船協會々報
帝國鐵道協會々報
鐵と鋼
電氣學會誌
電氣製鋼
土木建築雜誌
日立評論
名古屋工業會々報
滿洲技術協會誌
其他寄贈雜誌

廣　告　料（東京市京橋區築地上柳原町八番地 電話京橋 872 番、振替東京 3069 番 東京第一通信社取扱）

普通廣告　一回一頁　40 圓　一回半頁　25 圓

指定廣告
- 裏表紙三面對向及廣告初頁　一回一頁　60 圓
- 裏表紙三面　一回一頁　150 圓
- 色アート　一回一頁　75 圓

○指定廣告は凡て一箇年繼續申込のものに限り取扱ふものとす
○會員自身の廣告に對しては總て上記料金の一割引とす
○同一廣告の連續掲載申込に對しては半箇年分五分引，一箇年分一割引とす
○廣告に寫眞版又は木版等を挿入する場合は之に要する實費を別に申受くるものとす

寄稿に關する注意事項

(1) 御寄稿は成るべく本會の原稿用紙を用ひ横書きとすること，原稿用紙は御請求次第送附す。

(2) 御寄稿は止むを得ざる場合の外は成るべく本會の原稿用紙 150 枚（本會誌 50 頁）程度とされたし，若し前記頁數を超過する場合は適宜其の程度に縮少を御願ひすることもあるべし。

(3) **假名は平假名とし，數字はなるべくアラビヤ文字を用ひられたし。**

(4) 歐字は特に明瞭に認むること，

n と u, u と v, r と v, α と α, r と γ

其の他頭字と小字とを判然たらしむる事。

(5) **原稿には必ず冒頭に英文表題を添附されたし。**

(6) 附圖附表に就ては次の各項に御注意ありたし。

（イ） 圖面は其の儘縮寫し得る樣にトレーシング・ペーパー，オイル・ペーパー，トレーシング・クロース等とす。

（ロ） 凡て墨色を用ひインキ類或は彩色を施さゞる事。

（ハ） 方眼は青罫のものを用ひ（黃色，赤色の罫は使用せざる事）縱横線を必要とする部分には豫め墨線にて之を描き置かれたし。

（ニ） 圖表中の文字，數字は特に大きく肉太に書し縮寫したる後明瞭たらしむる事。

（ホ） 圖表類は製版の都合上可なり汚損するものと豫め御含み下されたし。

(7) 寫眞は特に明瞭たるも次を送られたし。

(8) 講演，論說報告の各欄に揭載の分には拔刷 20 部を寄稿者に贈呈するものとし，尙寄稿者の希望に依り實費にて御要求に應ずる事あるべし。

算式其の他の記し方大體標準。

(1) 本文，文字間に算式を挿入する場合には次の如く記すこと。a/b と書き $\frac{a}{b}$ を避けること。$(a+b)/(c+d)$ と書き $\frac{a+d}{c+d}$ を避けること。

(2) 獨立したる列に算式を記す場合は次の如く記すこと。$\frac{1}{3}x$ と書き $\frac{x}{3}$ を避けること。$\frac{1}{2}(a+b)$ と書き $\frac{a+b}{2}$ を避けること。$\frac{a}{b+c/d}$ と書き $\frac{a}{b+c\frac{c}{d}}$ を避けること。

(3) 千以上の數字は 53 247 000 の如く 3 つ單位に間隔をあけること。

(4) 名數は次の如く記し括弧の中の樣に書くことを避くること。

83.4 尺（八丈三尺四寸），7 吋（七吋），35 錢（三十五錢），13.56 圓（十三圓五十六錢），1〜4 時（一乃至四時間），88 326 噸（八萬八千三百二十六噸），1929 年 1 月 1 日（千九百二十九年一月一日）。

新入會者にして既刊會誌希望者に告ぐ

本會々誌は新入會者には入會の月より以降發行に係るものより配付致すべきに付其の以前の會誌御希望の場合は一部に付下記金額**振替口座東京一六八二八番**に拂込用紙通信欄に其旨記入請求せられたし

殘部內譯

第五卷一號二號	一部金　壹　圓
第六卷六號	同金　壹　圓
第七卷二號三號四號	同金壹圓五拾錢
第八卷一號	同金　貳　圓
第九卷一號二號三號五號六號	同金　貳　圓
第十卷二號三號四號五號六號	同金　貳　圓
第十一卷二號	同金　貳　圓
第十二卷三號	同圓貳圓五拾錢
第十二卷二號三號五號六號	同金　貳　圓
第十三卷二號三號六號	同金　貳　圓
第十四卷一號二號三號四號五號六號	同金　貳　圓
第十五卷一號二號三號四號五號	同金　壹　圓
東京市內外交通に關する調査書	同金　參　圓
大阪市內外高速度鐵道調査會報告書	同圓　壹　圓
土木學會誌索引	同金　五拾錢
震害調査報告書（一、二、三）	同金　拾六圓

本會會員轉居又は旅行の場合の注意

會員の宿所の不用なるときは會誌の配付を始め其他通信上に差支候に付御轉居の際は至急明細に御通知相成度又御旅行等にて御不在となるも會費支拂には差支なき樣御配慮相成たし

會費納付に付注意

本會々費は下記の通りにして本會より發する振替集金に對し是非御支拂願度事若し此の集金書へ十五日間中三回の取立金支拂なき場合は最寄郵便局に就き本會**振替口座東京一六八二八番**に（拂込用紙通信欄に會費たる事を記入の事）御拂込相成度尙會費一時納付の御豫定又は其の他の都合に依り支拂なき場合は直に御通知相煩度

朝鮮滿洲の一部及び靑島等振替貯金を取扱はざる地に居住せらるゝ會員は納期の翌月末頃迄集金を受けざるときは爲替其他の方法に依り直ちに御送金相成たし

會員種格	會費年額	自一月　至四月 第一期分二月徵收	自五月　至八月 第二期分六月徵收	自九月　至十二月 第三期分十月徵收
會員	金拾八圓	金六圓	金六圓	金六圓
准員	金拾貳圓	金四圓	金四圓	金四圓
學生員	金七圓五拾錢	金貳圓五拾錢	金貳圓五拾錢	金貳圓五拾錢

新に入會したるものは月割算として入會の翌月集金を發す

會費未納に付注意

會費は從來年額を第一期第二期第三期に分割し每年二月六月十月に振替貯金郵便として取立方を郵便局に依託の處往々集金郵便に對して故なく支拂を拒絕し尙他の方法に依りても送金なき者あれ共斯くては會費滯納者として遺憾ながら規則第十三條第一項に依り遂に會誌の配付を停止せらるゝに至るべく又本會に於ても未納金督促の手數一通ならず故に今後右樣のことなき樣特に御留意の上集金郵便に御拂込相成たし

會誌未着の場合の注意

會誌は每年每月十五日（印刷又は原稿等の都合に依り遲延する事あり）に發行し漏なく配付すべきに付未着の場合には一應本會に御照會相成たし從來往々發行後數ヶ月經過して照會せらるゝ向あるも斯くては殘部皆無となり遺憾ながら配付不可能のことあるべきに付御留意相成たし